

波木井殿御報

弘安五年九月一九日 六一歳

かしこ 畏み申し候。みちのほどべち事候はで、いけがみまでつきて候。みちの間、山と申し、かわと申し、そこばく大事にて候ひけるを、きうだちにす護せられまいらせ候ひて、難もなくこれまでつきて候事、をそれ入り候ながら悦び存じ候。さては、やがてかへりまいり候はんずる道にて候へども、所らうのみにて候へば、不ぢやうなる事も候はんずらん。さりながらも日本国にそこばくもてあつかうて候みを、九年まで御きえ候ひぬる御心ざし申すばかりなく候へば、いつくにて死に候とも、はかをばみのぶさわにせさせ候べく候。又くりかけの御馬はあまりをもしろくをぼへ候程に、いつまでもうしなふまじく候。ひたちのゆへひかせ候はんと思ひ候が、もし人にもぞとられ候はん。又そのほかいたはしくをぼへば、ゆよりかへり候はんほど、かづさのもばら殿のもとにあづけをきたてまつるべく候に、しらぬとねりをつけて候ひては、をぼつかなくをぼへ候。まかりかへり候はんまで、此のとねりをつけをき候はんぞんじ候。そのやうを御ぞんぢのため

に申し候。恐々謹言。

九月十九日

日 蓮

進上 波木井殿 御侍

所らうのあひだ、はんぎやうをくはへず候事、恐れ入って候。